台大日本語文研究第 33 期
2017 年 6 月，頁 65-79
2017-03-31 收稿，2017-04-25 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.33.65

《平家物語》〈うた〉與〈物語〉間的論述：以巻一「鹿谷」為中心

楊錦昌*

摘要

有關《平家物語》中的〈うた(Uta)〉與〈物語〉關連的研究尚不充分，至今仍有持續研究空間。因此，本論文以發生在 1177 年的「鹿谷事件」為主，聚焦於該事件肇端（原因）的相關〈うた〉與〈物語（説話）〉間的研究。具體探討的対象為鹿谷事件的中心人物藤原成親，以及與其相關的巻一「鹿谷」中的和歌與物語（説話）。此外，探討時也將「《平家物語》為何非將〈うた〉納入(物語)敘述」的議題納入思考。

關鍵字：《平家物語》、うた(Uta) 、物語、鹿谷事件、藤原成親

臺灣大學學術期刊資料庫

* 輔仁大學日本語文學系副教授

Of Uta and Monogatari in The Tale of the Heike With a Focus on Volume 1 "Shishigatani"

Yang, Chin-chang*

Abstract

Research on the relationship between Uta and Monogatari in *The Tale of the Heike* is not sufficient; further studies are expected. Thereupon, the present paper aims to research in this regard by focusing on the relationship between Uta and Monogatari with regard to the origins of The Shishigatani Incident (Shishigatani jiken), which took place in 1177. The specific objects dealt with in this study are *FUZIWARA no Narichika*, the central figure of The Shishigatani Incident, as well as uta and monogatari appearing in volume 1 "Shishigatani," related to *FUZIWARA*. Besides, I would also like to bring it into view why it is necessary to employ uta to narrate the stories in *The Tale of the Heike*.

Keywords: *The Tale of the Heike,* Uta(うた), Monogatari, Shishigatani incident(Shishigatani jiken), *FUZIWARA no Narichika*

臺灣大學學術期刊資料庫

* Associate professor , Department of Japanese Language and Culture, Fu Jen Catholic University

『平家物語』における〈うた〉と〈物語〉のはざま
―巻一「鹿谷」を中心にして―

楊錦昌*

要旨

『平家物語』における〈うた〉と〈物語〉のかかわりについての研究は、なお十分ではなく、さらなる研究を進めるべき余地がある。そこで、小論は、1177年に起きた鹿谷事件を中心に、その事件の発端（原因）に関連する〈うた〉と〈物語（説話）〉のはざまに焦点をあてつつ、論を進めることにする。具体的に扱う対象としては、鹿谷事件の中心人物の藤原成親とそれに関連する巻一「鹿谷」に見られる歌と物語（説話）である。また考察の過程において、『平家物語』においてなぜ〈うた〉が取り入れられて語られざるを得ないのか、という問題をも視野に入れつつ考察を進めたい。

キーワード：『平家物語』、うた、物語、鹿谷事件、藤原成親

臺灣大學學術期刊資料庫

* 輔仁大学日本語文学系副教授

『平家物語』における〈うた〉と〈物語〉のはざま
—巻一「鹿谷」を中心にして—

楊錦昌

一、始めに

周知の通り、『平家物語』は、中世の軍記物語として有名な作品であり、大まかな分類に基づけば、韻文に対する散文としてのジャンルに属するものである。とは言え、作品中には韻文的な要素が少なくなく、具体的には、韻文的なものとして三十一文字の和歌や短連歌など、およそ百首ほどを挙げることができる。

では、このような散文と韻文が混在する『平家物語』の様式は、歌を中核としてそれにまつわる平安時代の歌物語を代表する『伊勢物語』といった作品の様式と如何に異なるのか。また、なぜ散文的な作品としての『平家物語』に、和歌や短連歌といった韻文的な要素が取り入れられざるを得ないのか。この点に関して先行研究を概観した限りで言えば、こうした問題意識を直接的に視野に入れた論考は限られている。そこで今回は筆者の「『平家物語』に見る『歌物語的』様式の一考察」という論考[1]に続き、「『平家物語』における〈うた〉と〈物語〉のはざま」をテーマとして新たに検討を加えてみたい。

ちなみに本論の標題に示した〈うた〉と〈物語〉は、言うまでもなく、文字通り三十一文字の和歌を表す韻文としての〈うた〉を指し、また『平家物語』に見られる説話・物語を表す散文としての〈物語〉を意味する。しかし本論においてはもう一方で、大和言葉（仮名）で示す〈うた〉と、唐言葉（漢字）で示す〈物語〉を相対させることにより、『平家物語』の和漢混交の文体を示す試みもあることを、先ずは予め断っておきたい。こうした視点に基づくことにより、『平家物語』に認められる韻文対散文、または〈うた〉対〈物語〉

[1] 『台大日本語文研究』第 31 期（台湾大学日本語文学系、2016 年 6 月）P31-50

臺灣大學學術期刊資料庫

の狭間にどのような文芸的な意味が潜んでいるかについて、以下に考察を加えることを試みたい。

二、先行研究の概観

和歌に着眼した『平家物語』の研究は早くから見られるが、注 1 の筆者の論考においても触れたように、調査に基づけば、1932 年以降の約 80 年間におおよそ 30 本ほどが発表されている。中でも久保田淳と松尾葦江の論考は最も注目を受けるものであろう。久保田の論考[2]によれば、覚一本『平家物語』に見られる和歌の中で短歌形式を採るものが 97 首、短連歌が 3 首、合わせて 100 首あるとされる。さらにこれらが①「登場人物の個人詠」、②「古歌」、③「神仏の示現の歌」、④「落首」の四つのパターンに分類される。一方、松尾葦江の論考[3]においては、「物語の叙述をはこぶ時間という視点を導入して、和歌と散文脈との関係」が注目されている。さらに松尾氏は、まず久保田氏の論に基づいて、「巻六までは平家に虐げられた人々の詠であるのに対し、巻七以降は平氏とその同情者に限られる。つまりは述懐の歌は、喪われゆく者、敗れ去る者の心情の表出を主要な役割としているといえようか」と述べ、『平家物語』における和歌の機能に考察を加えた上で、以下の類型に分類する。すなわち、①「和歌が、事件や人物の行動の原因となる場合」、②「予言性を有する和歌及び象徴的機能」、③「叙述のテムポを変える機能」、④「時間の総括・確認やたどり直しをする機能」、⑤「情緒的主体の人称を変える機能」の五類型である。以上の両氏の研究は、和歌を分類し、主に「和歌が原典から離れて次第に脚色されてゆくこと」、「引歌についてのこと」、及び「和歌の機能」等の側面に目を向けて論じたものであるが、これらは必ずしも、文もしくは和歌と物語（説話）との

2 「平家物語と和歌」『国文学解釈と鑑賞』32-10（至文堂、1967 年 9 月）。

3 「覚一本平家物語と和歌－平家物語の時間・その二－」（軍記物談話会、1984 年 3 月）。この論文の初出は『軍記と語り物』20 であるが、本稿が参考にしたのは、『軍記と語り物』第 40 号記念復刊（軍記・語り物研究会、2004 年 8 月）である。

臺灣大學期刊資料庫

直接的なかかわりに重点を置いて論じたものというわけではない。

つまり、従来「平家物語における和歌」に関わる研究が試みられたことがあるとはいえ、『平家物語』の韻文と散文、または和歌と物語（説話）のかかわりに焦点をあてた論考は、必ずしも多いとは言いがたい。管見に及ぶ範囲に基づけば、こうした観点から最も直接的に和歌と物語のかかわりに視点を向けたものとして、日本においては、佐佐木克衛[4]や松尾葦江[5]等の論考を取り上げることができるに留まる。同様に、台湾において発表された論考もこうした観点からのものではなく、前述した筆者の『平家物語』に見る「歌物語的」様式に着眼した論考に過ぎない。

こうした研究動態は、まさに『歌語り・歌物語事典』[6]の研究概要の解説に示された通りである。それによれば、「『平家物語』と歌語りとの直接的関係は想定できず、専ら歌物語の影響関係が問題になってくる（下線は筆者による。以下同）」ということである。また、「ただ、総合的な研究はほとんど手が付けられていないと言ってよく、和歌との関連を論じた中で若干触れられている程度である」とも述べられている。このことから、韻文を中核として散文的な要素を含む「歌物語」・「歌語り」と『平家物語』との関係に着眼した研究がなお不足していることを窺うことができよう。

こうして見ると、『平家物語』における〈うた〉と〈物語〉のかかわりについての研究は、なお十分ではなく、さらなる研究を進めるべき余地があるものと思われる。そこで筆者は、前述した論考において、源頼政の和歌を例として『平家物語』に見る「歌物語」的様式について概観し、いずれも和歌と散文が相互に呼応したり、対等に補ったりするものであることを確認し、同時に以下の事実を指摘

4 『軍記物とその周辺　佐々木八郎博士古稀記念論文集』（佐々木八郎博士古稀祝賀記念事業会編集委員会（編）・早稲田大学出版部、1969 年 3 月）に収録される「散文と和歌との関わりあいについて―『平家物語』の場合―」。

5 『和歌文学の世界第十集　論集　和歌とレトリック』（和歌文学会編、1986 年 9 月初版）に収録される「歌文融合－中世文学における和歌と散文とのかかわり－」（第三節 P277～282）。

6 雨海博洋・神作光一・中田武司編（勉誠社、1997 年 2 月）

臺灣大學圖書館

した。

すなわち、緊張感が説話の展開の頂点に達した瞬間に散文としての説話に和歌を取り入れることにより、説話が和歌と関連・協調して築き上げる「歌物語」のパターンが認められるという事実である。こうしたパターンには、説話の底流に流れる『平家物語』という作品の歴史叙述を潜ませている独特な「歌物語」としての要素が認められる一方で、和歌の霊力によって恥辱から脱した歌徳説話についての要素や機能をも読み取ることができる。さらに、縁語的な鎖の如く繋がる様式や、和歌を導入する前後において劇的な場面で登場人物が涙を流したり感動したり嘆いたりするような詠嘆的な類型、そして中世という時代を強く反映するものとして連歌的な「歌物語」のパターンなどが確認できる。加えて、自分史や登場人物の伝記的な和歌と散文とによって構成された「伝説的歌物語」と言えるような「歌物語」の様式も、ここには明らかに存在している。これらの様式が見られるのは、「歌物語」的類型と、その要素の中に『平家物語』という作品の底流において歴史叙述に通じるものとが潜んでいるからであろう。

本論は、以上の観点に基づき、前述した研究の一環として考察をさらに深めるべく論じるものである。具体的には、1177 年に起きた鹿谷事件を中心に、その事件の発端（原因）に関連する〈うた〉と〈物語(説話)〉のはざまに焦点をあてつつ、論を進めることにする。具体的に扱う対象としては、鹿谷事件の中心人物の藤原成親とそれに関連する巻一「鹿谷」に見られる歌と物語（説話）である。また考察の過程では、『平家物語』においてなぜ〈うた〉が取り入れられて語られざるを得ないのか、という問題点をも視野に入れつつ考察を進めてみたい。

三、歴史、物語と〈うた〉の接点

鹿谷事件とは、安元 3 年（1177）に起きた反平氏運動のことであり、日本中世に実際に生じた歴史上の事件である。この事件発生の

臺灣大學學術期刊資料庫

発端は、平家の人事に対する藤原成親の不満によるものである。つまり、藤原成親は、1177 年 1 月 24 日に 40 歳の藤原師長が辞任した[7]左大将の補欠の任官を切望していたにもかかわらず、平清盛の嫡男である 40 歳の平重盛だけでなく、31 歳の次男の平宗盛にすら超えられてしまったため[8]、所期の望みを叶えることができず、密かに平家打倒の密議を謀ったことによる。覚一本『平家物語』「鹿谷」には、成親の憤慨した心情と事件の発端が次のように述べられている。

> 新大納言成親卿のたまひけるは、「徳大寺・花山院に超られたらむはいかゞせむ。平家の次男に超らるゝこそやすからね。是も万づおもふさまなるがいたす所なり。いかにもして平家をほろぼし、本望をとげむ」とのたまひけるこそおそろしけれ。（123 頁）[9]

この鹿谷事件をめぐる歴史に基づく物語において、藤原成親は左大将への任官を熱望するあまり、「八幡に百人の僧をこめて、信讀の大般若を七日よませられける」（121 頁）とあるように祈祷による祈願を行った。その最中に、男山のほうから三羽の山鳩が甲良の大明神の前にある橘の木に飛んで来て互いに食い合って死んでしまった。そこで神祇官に占ってもらった結果、「天下のさはぎとうらなひ申。但、君のつゝしみに非ず、臣下のつゝしみとぞ申ける」（121 頁）と告げられる。しかしながら、藤原成親はその占いを恐れず、左大将任官の祈願のため、人目を忍んで七夜続けて上賀茂神社に詣でた。七日目の満願の夜に帰宅し、疲労の余り眠りについていると一つの夢を見て、その夢により次の一首がもたらされた。

> さくら花　かもの河風　うらむなよ　ちるをばえこそ　とゞ

---

[7] 近代デジタルライブラリーに搭載される国史大系第 9 巻『公卿補任前編』（http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991099）において「左大將。正月廿四日辭大將。三月五日任太政大臣。」（経済雑誌社、明治 32 年 5 月、494 頁）

[8] 平重盛が右大将から左大将、平宗盛が右大将に任じられる。同注 7『公卿補任前編』において、「平重盛四十右大将。正月廿四日遷任左大將。三月五日任内大臣。」または「平宗盛卅一。正月廿四日遷任。今日兼任右大臣。」と記している。

[9] 以下『平家物語』の本文引用は高木市之介・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注の岩波日本古典文学大系 32（岩波書店、1959 年 2 月）による。

めざりけれ（122 頁）

この歌は平家と関わる『国歌大観[10]』の 8 番の歌であり、『平家物語』の 6 番目の歌である。この歌の本歌として見当をつけるとすれば、歌語の重なりが最も多い歌として、源実朝『金槐和歌集[11]』に収められる下記の春歌を指摘することができるのみである。

さくら花　ちりかひ霞む　春の夜の　おぼろ月夜の　賀茂の川かぜ（85 首、34 頁）

藤原成親が夢で詠んだ歌と『金槐和歌集』の歌との間に些か表現上の差があるとは言え、「賀茂の川かぜ」にさくら花の「ちるをばえこそとゞめざりけれ」と「ちりかひ霞む」という表現が大きく異なるというわけではない。

そこで以下では、歌の作者（歌い手）、歌についての解釈、歌を取り入れる必要性（構造）、そして桜の開花時期と歌詠の季節の不一致という四側面について、順を追って述べることにする。

四、〈うた〉、物語、そして歴史

そこでまず託宣歌の作者について見ることにする。注 3 の松尾氏の論では、この歌は上賀茂の神詠だとされるのに対し、『平家公達の歌[12]』などにおいては「読み人知らず」とされる。もし賀茂明神の神詠だというのであれば、神は、夢を通して藤原成親に「うらむなよ」「ちるをばえこそとゞめざりけれ」（願いを叶えられない）という意思を伝えることにより、語り手と距離を保ちつつ（区別をつけて）物語や説話を展開させていくことになる。一方、「読み人知らず」だというのであれば、歌を歌う人が語り手と距離を置くことなく、語り手として神と同じ立場に立ってしまうことになる。

以下の図一はこの歌について主な校注本に基づき整理したもので

[10] 新編国歌大観編集委員会『新編国歌大観第 5 巻歌合編、歌学書・物語・日記等収録歌編』（角川学芸出版、2012 年 2 月 29 日）による。
[11] 本文引用は樋口芳麻呂校注の新潮日本古典集成第 44 回（新潮社、1981 年 6 月発行・1992 年 3 月三刷）による。
[12] 西村誠『平家公達の歌』（双葉社、2012 年、5 月）

臺灣日本語文學報刊資料庫

あり、各本の間の差異を先にここで確認しておきたい。

【図一】

校注本	注　　釈
大系本[13]㊦ pp.122	桜の散るのは賀茂の神にも止めらないといい、裏面に成親の望みが達せられないのもやむをえないと暗示したのである。
新全集本① pp.68-69	桜に成親、賀茂の河風に賀茂神を擬す。せっかく祈ってくれても願いをかなえられないが、神を恨むな、の意をこめる。なお桜花に院および側近の勢力を擬し、その没落を散るといったとみることもできる。
集成本㊦ pp.82-83	桜花よ、賀茂の川風を恨むな。賀茂の神威を以てしても花の散るのをとどめることはできぬのである。神力にも限りがあると言い、非法の願を退ける託宣歌。

上に示したように､テキストにより解釈はそれぞれ異なるものの、共通する点は賀茂の神に頼っても願いが達せられないという神託である。また、大系本の注釈では明示されていないものの､「桜花」を成親､「賀茂の川風」を賀茂明神に譬える点の他に､「恨むな」と諭す点も共通する点である。しかしながら、大系本とそれ以外の二本との間では「桜花に院および側近の勢力を譬える」こと､「神力にも限りがある」こと、または「非法の願を退ける」という点がやや異なる。つまり、これらはそれぞれ藤原成親（後白河院）と神の立場や視点に焦点を当てて述べる解釈を採用したものである。筆者は基本的にはこの解釈に賛同すると同時に、なぜ「詠み人知らず」の託

[13] ここでは、岩波書店刊行の『日本古典文学大系』を大系本、小学館刊行の『新編日本古典文学全集』を新全集本､そして新潮社刊行の『新潮日本古典集成』を集成本とする。

臺灣人文學術期刊資料庫

宣歌が説話的な物語に取り入れられる必要があるのかという点について、訝しさを禁じ得ない。

『平家物語』における散文と韻文との関わりについて注 5 で触れた松尾氏の論考によれば、(和歌が[14])「叙述の中に人物や神仏の意志表示、伝達として挿入される」ことが最も一般的だとされる。確かに上記の和歌においては、賀茂明神によって啓示される「うらむなよ」という言葉だけではなく、賀茂明神が夢を通じて成親に呼びかけようとする叙述が、歌全体を通して挿入される。しかもこの歌は、単に叙述の中に挿入されるのみではなく、物語の流れの軸を踏まえ、前の物語・説話（エピソード）を受け入れると同時に、さらにその先の物語・説話（エピソード）に向かって物語を展開させるべく、両者を結びつける機能を果たしている。

しかし一方で、『平家物語』が如何にして物語の緊迫感や緊張感を高めようとしているのかという点について見れば、「新大納言是におそれをもいたさず」とあるように、歌の直前において神祇官の占いを無視し、さらに歌の直後において「新大納言猶おそれをもいたさず」とあるような言説が効果的に機能している。その結果、二つの「おそれをもいたさず」という言説のもとで、一つの散文的な説話（エピソード）と韻文的な歌が挟み込まれることにより、緊迫感と緊張感がいよいよ高められる。したがって、その表現は、散文的なエピソードと、韻文的な和歌が一体となって作り上げられたテキスト中における作品世界を作り上げる。かくて、こうした二重構造のもとにおいて、「散文と韻文との関わり方」が姿を現すことになる。また一方で、和歌を独立したものとして見るのであれば、独立した韻文である和歌と、その前後の散文的な要素とが重なることにより、**「エピソード＋物語・説話」**が一体化したものとして全体で一つの作品世界を作り上げる。このようなテキストの構造を図式にして示せば以下の図二のようになる。これをかりに二重構造的な「散文と韻文との関わり方」と呼ぶことにする。

[14] 筆者による。

臺灣大學學術期刊資料庫

【図二】

← ←	（物語の流れの方向）	← ←
物語・説話＋エピソード＋【おそれをもいたさず】	**和歌＋エピソード**	**物語・説話【おそれをもいたさず】**
物語・説話＋エピソード＋【おそれをもいたさず】	**和歌**	**エピソード＋【おそれをもいたさず】＋物語・説話**

この図が示すように、もし和歌が取り入れられなければ、和歌の前後の「**エピソード**」と「**物語・説話**」を結びつける構造が失われてしまう。のみならず、「平家の次男に超らるゝこそやすからね。是も万づおもふさまなるがいたす所なり。いかにもして平家をほろぼし、本望をとげむ」とあるように、藤原成親が平家の人事に対する恨みによって平家打倒という歴史的大事件を企て、さらに神祇官の占卜と賀茂明神の託宣を無視する成親の人物像までもが、これによって崩れてしまうことになる。

ところで最後に、桜花と歌詠との季節上の時間関係について些か触れてみたい。宮田尚は「109. 神の声のからくり[15]」において、「さくら花かもの河風うらむなよちるをばえこそとゞめざりけれ」という歌に出る桜の開花時期と、歴史上で重盛兄弟が左右の大将になった1月24日の時間とが一致しないと述べている[16]。これは、歴史的事実に沿わないことを、語り手が意図的に物語に取り入れたためであろうと筆者は推測する。なぜなら、歴史的事件の発生時期と歌が詠まれた時期をずらして設定することにより、藤原成親の左大将の任官への期待が外れた失望感を一層強めると同時に、以下の引用文と前後呼応させることで、その失望感と平家への恨みによって平重

[15] 『平家』余聞―海峡からの展望（梅光学院大学、アルス梅光）による。

[16] 古来、日本では季節感を大切にする。ウメの時期にサクラの歌は詠まない。散る花を持ち出して、神が祈願の不首尾を伝えたとある以上、この歌が成親に示されたのは、サクラの時期だと見なければならない。ところが、公卿の任命簿である『公卿補任』によれば、重盛兄弟が左右の大将になったのは1月24日だ。サクラは散るどころか、まだ蕾にもなっていない。（アルス梅光）

盛への恩を忘れるあまり、こうした行動を取る藤原成親の人物像を強調しようとするテキストの意図を読み取ることができるからである。

> 父の卿は中納言までこそいたられしか、其末子にて位正二位、官大納言にあがり、大國あまた給は（ッ）て、子息所從朝恩にほこれり。何の不足にかゝる心つかれけむ。是偏に天魔の所爲とぞみえし。（123 頁）

因みに神から告げられた前述の「うらむなよ」という託宣は、「只一向平家のまゝにて」とあるように、驕り高ぶる平家のもとでは左大将任官への期待が当てにならないことをも暗示していると思われる。

五、結語

以上『平家物語』における〈うた〉と〈物語〉について、「鹿谷」を通して歌の作者、歌についての解釈、歌を挿入させることの必要性（構造）、そして桜及び歌の季節という四つの側面に分けて考察を進めて来た。それに基づけば、以下の諸点を指摘できよう。

まず、「上賀茂の神詠」と「読み人知らず」の立場に対する解釈の違いにより、歌や登場人物に対する語り手の距離の異なることが知られる。

次に、歌についての解釈には異同があるものの、望みが叶えられないという暗示の存在する点に共通点がある一方、「桜花に院および側近の勢力を譬える」とする見解は、院と平家との関係に注意して解すべきである。

また、和歌と前後の文脈、繋がり、そして構造の面に注目することにより、二重構造的な「散文と韻文との関わり方」を認めることができる点も注目すべきであろう。これは、筆者が前述した論考においては検討がなお不十分であった点であり、きわめて独特な類型であると言える。

さらに、こられの例において、もし和歌が取り入れられなければ、

臺灣大學學術期刊資料庫

「物語・説話」の構造や、占卜と託宣を無視しようとする藤原成親の人物像が崩れてしまう恐れがある。したがって、ここではこうした韻文の和歌が散文の物語・説話に潜んでいる構造や人物像に影響を及ぼした「歌物語的」なパターンを確認できると言える。

加えて、桜の開花時期と歴史的事件の発生時期のずれが意図的に設定されている点に、物語上及び歴史上の人物の失望感を表そうとする作品の意図も読み取ることができる。同時に、ほしいままに振る舞う平家の傲りもそれによって強調されることとなる。

以上は、鹿谷事件の発端に論点を絞って検討を加えたものであるだけに、この問題の考察にはさらなる深さが求められよう。そこで、今後機会を改めて稿を起こすことにより、鹿谷事件に関連するほかの人物をも同時に扱いながら、鹿谷事件の経緯とそれに関連する観点をも含めてさらに考察を深めることを試みたい。

【付記】本稿は中華民国行政院科技部の研究助成（助成番号103-2410-H-030-060-MY2）を受けた研究による成果の一部であり、2015年10月25日に行われた「2015年臺大日本語文創新國際學術研討會」での発表に加筆，修正したものである。ここに記して各位に感謝の意を表します。

参考文献

経済雑誌社編（1899）『国史大系第9巻　公卿補任前編』経済雑誌社（http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991099）

高木市之助・大澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注（1959）『日本古典文学大系32　平家物語　上』岩波書店

久保田淳（1967）「平家物語と和歌」『国文学解釈と鑑賞』32-10、p.233-238　至文堂

佐佐木克衛（1969）「散文と和歌との関わりあいについて―『平家物語』の場合―」『軍記物とその周辺　佐々木八郎博士古稀記念論文

臺灣大學學術期刊資料庫

集』（佐々木八郎博士古稀祝賀記念事業会編集委員会編）、p.353-370　早稲田大学出版部

水原一校注（1979）『新潮日本古典集成第 25 回　平家物語上』新潮社

松尾葦江（1986）「歌文融合－中世文学における和歌と散文とのかかわり－」『和歌文学の世界第十集　論集　和歌とレトリック』(和歌文学会)、p.277-282 笠間書院

樋口芳麻呂校注（1992）『新潮日本古典集成第 44 回　金槐和歌集』新潮社

市古貞次校注・訳（1994）『新編日本古典文学全集 45　平家物語 1』小学館

雨海博洋・神作光一・中田武司編（1997）『歌語り・歌物語事典』勉誠社

松尾葦江（2004）「覚一本平家物語と和歌－平家物語の時間・その二－」『軍記と語り物』40 記念復刊、p.37-48　軍記・語り物研究会

新編国歌大観編集委員会（2012）『新編国歌大観第 5 巻歌合編、歌学書・物語・日記等収録歌編』角川学芸出版

西村誠（2012）『平家公達の歌』双葉社

楊錦昌（2016）「『平家物語』に見る『歌物語的』様式の一考察」『台大日本語文研究』第 31 期（台湾大学日本語文学系、年 6 月）P31-50

宮田尚「109. 神の声のからくり」『平家余聞―海峡からの展望』梅光学院大学アルス梅光
（http://www.baiko.ac.jp/university/archives/ars/109-神の声のからくり）

臺灣大學學術期刊資料庫